

宇都宮と軍馬の記憶

栃木県立博物館 学芸企画推進員 石川 雄也



栃木県護国神社の山砲兵第三十三聯隊鎮魂碑(右)と軍馬慰霊碑(左)

下栗町を横切る下栗大塚通りに、2基の石碑がある。一方は「日露戦役出征馬匹記念馬力神」と刻まれた碑で、建立は明治37年4月21日。土台を除く高さは91センチ、最大幅は39センチ。裏面には下栗村大塚坪で軍馬の徴発に応じた7名の名前が並ぶ。もう一方は「支那事变出征軍馬碑」と記された昭和14年11月28日の碑。高さ202センチ、幅79センチと大型で、裏面に28名の馬主の名が連なる。

こうした碑は軍馬慰霊碑などと呼ばれる。戦地に赴き、二度と故郷へと戻らなかった馬たちを弔う碑だ。栃木県護国神社にある山砲兵第33聯隊戦友会が建てた軍馬慰霊碑のように、帰還者や陸軍将校が建立する場合もあるが、大半は農耕馬を軍に徴発された農家が共同で

造ったものだ。日露戦争と日中戦争の時期には宇都宮市でも多くの碑が築かれ、管見の限りでは20基以上が確認できる。その種類はさまざまで、馬頭観音や勝善神、馬力神、生馬神などの馬を守護する神仏の名を冠した碑もあれば、戦没者の追悼と同様に記念碑や忠霊碑の形をとる碑もある。

軍馬は、陸軍の軍馬補充部が民間の優良馬を買い上げ、平時でも約3万頭が確保された。県内では那須町や壬生町で軍馬購買が行われた。軍馬の多くは武器や食料などの運搬に利用されたが、物資の輸送ルートは攻撃の対象となり、死傷する馬が後を絶たなかった。飢餓や疫病で斃死する馬も多く、その不足を補充すべく軍は農耕馬を取り立てるに至った。

当時、国産馬の総数は150万頭前後で推移していたが、日露戦争では約17万頭、日中戦争では約70万頭の国産馬が戦争に関わった。戦争を生き抜いた軍馬も、大半が国内や連合諸国に向けて払い下げられたため、故郷の飼い主は自分の馬の安否を知る由もなかった。

当時の農耕馬と言えば、田畑を耕し、荷物を運び、さらに糞は肥やしとなるなど、さまざまな面で農家を支えてきた。また馬小屋は母屋



下栗町の馬力神(右)と出征軍馬碑(左)

の中にあり、厩舎裏から馬の様子が見える家も多く、馬は物心ついた頃から側にいる最も身近な動物だった。冒頭で紹介した下栗町も、明治10年の時点で本籍を置く68戸で73頭の馬を飼育していた記録があり、大半の家に1頭は馬がいたことが分かる。

農村に残る軍馬慰霊碑は、その地で軍馬の徴発があったことの証である。先祖が国のために馬という貴重な財産を捧げたことを表明している。しかしそれ以上に、共に暮らし共に働いた馬という家族を、悼み弔い忘れぬよう語り継ごうとする、人々の思いの現れでもある。寺社や路傍で軍馬慰霊碑を見かけた際には、その地を駆けた馬の姿に思い馳せてみてはいかがだろうか。

あなたの本づくりをお手伝いします。

一冊のぬくもりを大切にしたい。

これが私たちの編集コンセプトです。

図書出版・企画・編集・制作

36th
SINCE 1985

随想舎

<http://www.zuisousha.co.jp>

〒320-0033 栃木県宇都宮市本町10-3 TSビル

まずは
お電話を

028-616-6605

総務・営業部 1F TEL.028-616-6605 FAX.028-616-6607 編集・制作部 2F TEL.028-616-6606 FAX.028-616-6608 e-mail: info@zuisousha.co.jp